

## スクリーンの向こうの「異世界」

ふつうなら見つけれられるはずのない超自然現象。

でも、ネットには心霊写真も動画も溢れている。「異世界から」と称するものもあつたりする。

こわさを楽しむ方法は、テクノロジーの変化とともに変わっていく。

**廣田龍平** ひろた りゅうへい / 東洋大学非常勤講師

### なかなか見つからない

筆者は文化人類学・民俗学の立場から、日本の妖怪や怪談の研究をしている。だから「こわいもの」を探しまわって調べているのは確かなのだが、残念ながら「零感」体質（靈感がまったくないので、そう気軽に「見つけました!」と言えるようなものはない。もしそういうことがあれば喜んで自分を研究したいのだが、そうそう都合のいいことは起こってくれない。むしろ——よくあることだが——記録として残されたもの（怪談集や民俗誌など）を読んだり、地元の人々が見つけたものの話を聞いたり、時には描いてくれたりしたものを参考にして、妖怪や怪談のことをいろいろ考えている。写真や動画も、撮れたら撮れたで「心霊写真」や「心霊動画」になってしまうし、今のところ、それらしきものが写っている画像は見つかっていない。そのようなわけで、

どうしても間接的な情報しか集まらず、妖怪「そのもの」を見つけることなどできないと思っていた。せいぜいが「出る」ところに行ってみて、何も写っていない写真を撮って帰るか、雰囲気の違いを感じて何となく納得してみる——といったところだった。

だが、それが勘違いであることに気づいたのは、遅ればせながら2019年の夏ごろガラケーからスマホに乗り換えてからである。名前だけはよく聞いていた動画アプリのTikTokを何の気なしに入れてみたところ、まったく靈感もなさそうな一般の人々により、心霊系の映像がたくさんアップロードされていることを知ったのである。昭和生まれの筆者にとって、心霊写真は霊能者が鑑定して本や雑誌に載るものだったし、心霊動画はオカルト系のテレビ番組で紹介されるうさんくさいものだった——つまり商業メディアの領分だった。しかし画像・動画SNS全盛期の現在、個人が「こわい」と思った映像はそのまま、霊能者やディレクターの選別なしに、じかに別のユーザーに届いてしまう。現代アメリカに伝わる有名妖怪に、異様に細長いスーツ姿でのっぺりとした顔の、子どもを襲う「スレンダーマ

ン」というものがあるが、よく考えてみれば、この怪物もまた、ネット上に投稿された不気味な写真から広まったものだった。インターネットでは、商業メディアに染まっていない妖怪も幽霊そのものも、簡単に見つけることができるのだった。

### スクリーンのなかの恐怖

筆者がようやくスマホの操作に慣れてきた2020年初頭、コロナ禍が本格化し、対面調査がキモであるフィールドワーカーは困難な状況に陥ってしまった。そんななかでもインターネットを閲覧することは制限されなかったので、筆者は本腰をいれて、SNSのユーザーが何をこわがっているのか、あれこれながめてみることにした。意図的にそのようなことを続けていると、TikTokのタイムラインが怪奇動画や心霊スポットや事故物件の実況配信ばかりで埋まっていくようになった。

その多くは、言ってみれば、たわいのないものである。風が吹いていないのに風船が流されたり、お堂のケーブル錠がバタバタしていたり、人影がないのにコンビニの自動ドアが開閉したり、人形が動いたり、撮った覚えのない写真がカメラロールに見つかったり、何もなければ空間で動作が検知されたり、やはり何もなければなのに顔認識が作動したり、竜のような姿の雲が浮かんでいたり。どれもかつての心霊写真のようにダイレクトに顔が写っているようなものではなく（そういう古典的なものもないわけではないが）、むしろこの世界のどこかに不可思議なものがあるとか、「現実がバグる」——デジタルゲームのバグのように、不自然に動作が停止・加速したり、モノが消失・出現したりする現象に対するネットスラングの一つ（英語圏だとglitches in real lifeなどと言う）——ことがあるとか、そういった宗教的信仰とも言えない漠然とした曖昧な不安や期待が潜んでいるように思われた。ユーザーも素朴に「信じている」のではなく、何かよく分からないことがあったので、とりあえず「#心霊」とタグ付けして広めてみる……程度の動機で投稿しているようだった。

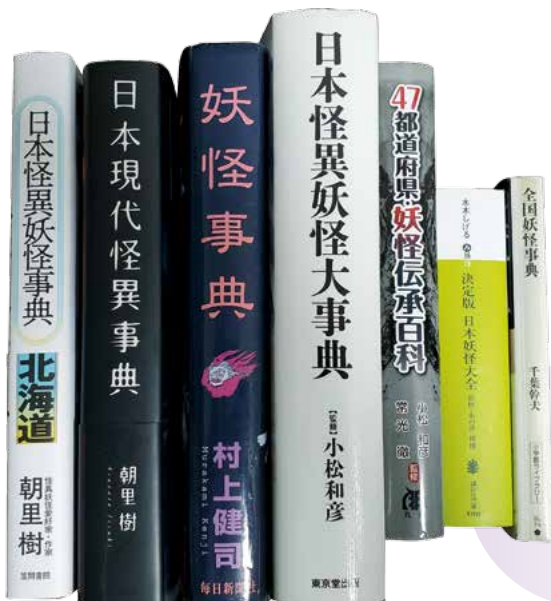


陸前高田市の「奇跡の一本松」。ここに近づくと霊を感じるという人がいた（2014年10月11日、筆者撮影）。



京都市の深泥池。有名な心霊スポットだが意外と交通量が多い（2020年11月25日、筆者撮影）。

代表的な妖怪研究書の一つ、柳田國男の『妖怪談義』(1956)は、目に見える妖怪の姿よりも「音」や「声」のほうを重視していた。



日本に伝わる妖怪の数は計り知れない。多くの妖怪事典が出版されているが、姿が明確なものは、やはり多くない。

## 異世界からの実況

そうしたなか、たまたま見つけたのが、一見すると何の変哲もない屋内や都市の風景が表示されるだけの一連の動画だった(言語は英語)。とくに人物が映っているわけでもない。しかしバズっている(三千万回以上再生されている)。どうしたことだろうと思い、投稿者の動画をさかのぼってみると、やはり同じような動画ばかり載っている。ただ、どれにも人がひとりもいない。最初の動画(2020年11月28日)に付されたキャプションを見てみると「午前11時なんだけど、太陽が昇ってない? アパートに誰もいない?」とある。よく見てみると、確かにどの動画も暗い。最初に出くわした動画をもう一度見てみると、階段から「何か」が駆け上がってきていた。投稿者はどうやら、それが人ならざるものであると言いたげだ。つまりこれは、「自分だけがまったく見知らぬ異世界に放り出された」状況だったのだ。人ならざるものは眼光だけだったり恐ろしげな声だけだったりした。

異世界からの通信といえば、2004年1月の深夜、巨大ネット掲示板「2ちゃんねる」(現・5ちゃんねる)のオカルトを話題にしたスペースで、電車に乗っていたら見知らぬ駅(きさらぎ駅)に着いてしまい、戻り方がわからない——という投稿があり、最終的に実況が途絶えたことがあった。2010年代以降、「私も見知らぬ駅に迷い込んでしまった」という実況投稿が流行りはじめ、2021年も「5ちゃんねる」でいくつか報告がある。そういう日本のもの

は大半が文字だけで、画像があるとしてもせいぜいブレた写真ばかりだったが、英語圏ではりっぴな動画が作られ、ときにはライブ配信があるなど、なかなか凝っている。

探してみると、似たような状況に陥ったアカウントがいくつも見つかった。いずれも都市部が舞台となっている。なかには「#arg」(ARG=代替現実ゲーム)というタグがはじめて付いていて、分かる人には分かるものもあったが、それでもコメント欄を見るとかなり本気になって心配している人々もいた(バズった動画ならば日本語のコメントも多い)。擬似的なフィールドワークというわけではないが、筆者も単に「観察」するだけではなく、ときどきコメント欄に書き込んでみた。フォロワーが多い他の異世界実況系アカウントの動画も、日本語のコメントが多かったので、状況をつかめていない人向けに「似たような状況にはまりこんだアカウントが少し前にもありましたよね」とコメントし、他のユーザーの疑問にも応答していたところ、540以上の「いいね」をもらってしまった(1つ目のQRコードのリンク先参照)。このアカウントはいつのまにか見知らぬ建物内(出口がどこにもない)をさまよっていたというものだが、#argタグがついている。

## いつもどこかに、なにかが、いる

心霊動画や異世界実況をスマホの小さな画面で見ると、フィールドに行き、心霊スポットに突撃するよりずっと安全だ。だが、この世界自体が、



TikTokの@the\_exits\_are\_missingというアカウントが投稿した「異世界」からの動画。出口のみつからない室内に閉じ込められてしまい、ようやくそれらしき出口を発見したが、ある事情により脱出できないことが分かったという内容。ログインし日本語環境で閲覧すると、コメント欄の上のほうに筆者(「かんなにらせ」)のコメントが現れる。



2021年6月21日時点で3000万回以上閲覧されたTikTokの心霊動画(投稿元アカウントは@4thwall2020)。夜間、神社と思しき施設で、誰もいないにもかかわらず、ワイヤー錠が激しく動いているという内容。



TikTokの@where\_is\_the\_skyというアカウントが投稿した「異世界」からの動画。これも3000万回以上閲覧されたもので、階段を黒い影が駆け上がってきたので必死で撮影者が逃げるという内容。

何の前触れもなく、どこかで突然バグってしまう、そして何事もなかったかのように平常運転を続けてしまう、自分がいきなりまったく見知らぬところに放り出される、そういった「可能性」を、見る人につきつけている。たとえば2020年、世界各地で行なわれたロックダウンによって生じた都市景観は、無人の異世界と酷似している。ふつう、建物のなかになら人がいるはずだが、もし内側にも誰もいなかったら? 異世界からの実況が流行っているのは、そうしたイメージのしやすさがパンデミックにうながされたから、というのもあるだろう。

おそらく、マスメディアと関係のない個人々が心霊スポットなどの怪奇的空间を実況・報告し、それを不特定多数の人々が閲覧して共有するという経験は、SNSによって初めて可能になったものである。とりわけ異世界実況は、投稿者の匿名性と動画編集技術の大衆化によるリアリティの増強、そして無数のコメントが煽り立てることによって成立した、新たな恐怖と謎解きのフィールドであろう。前近代の妖怪たちは西洋科学の啓蒙のなかで消え去っていったが、21世紀に入ってもなお、不思議で怪奇なもの装いを変えて現れているのである。FP